

4月19日(土)・20日(日)

色々なネタをご用意しております

新企画

寿司バイキング

1貫

1000(税込)円〜

4月初めに新企画として『寿司バイキング』をやってみたのですが、思いのほか大人気で、沢山のお客様に喜んで頂きました。

そして先日道の駅たかのさんとコラボさせて頂いた寿司販売も、4月なのに4月なのにー！雪まじりの悪天候の中、沢山のお客様に足を運んで頂き本当にありがとうございます。

さて、今回の広告は寿司バイキング！土曜日、日曜日の2日間!!ネタも色々、組み合わせも自由!!お好きなネタをお客様自ら選んで自分好みに盛り合わせられます。

価格は一貫100円〜300円迄でやらせて頂きます。是非自分好みのお寿司にしてみませんか？
ご来店お待ちしております！

西田鮮魚店 店長 祐宗 優司



西田鮮魚店

☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

『上野池』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



I 孫と悦子と私と

この春、上野池の桜は4月12日の土曜日が満開だった。娘が、お産のため一歳半の男の子を連れて帰ってきている。その孫は、春の陽気の中、家にいるのが嫌らしく、しきりに外に出たがる。仕方ない。昼ご飯を食べさせて、悦子と二人、その子連れて散歩することにする。悦子が乳母車、いや、今はベビーカーか、そのベビーカーに乗せようとするので、制止して抱っこする。大丈夫？という顔をして見るが、大丈夫だ。爺じは婆ばより力持ちだ。それに歩道に出れば歩かせる。

上野池には600本のソメイヨシノが咲いているらしい。でもそれだけじゃない。池を囲む土手にはレンギョウやユキヤナギが、びっしりと連なり、主役のソメイヨシノのやさしいさくら色を引き立てる。これこそが上野池の魅力だ。

このうえないほどの花見日和。大勢の人が訪れていた。湖畔をゆるやかに歩く若いカップル。ベンチに座り弁当を開き、缶ビールを楽しむ老夫婦の姿も。子犬を連れ来た家族がやけに多い。こうしてみると犬も家族だということがよくわかる。

孫をおろし歩かせる。一歳半だ、よちよちと、時に転びそうになり手をついて爺じと婆ばを見上げる。愛おしい。こどもは何に興味をもつかわからない。

歩道には10メートルおきくらいにベンチが置いてある。孫はベンチの前にくるたび、よじ登る。やっこさ登って、ちょこんと座る。10秒もすると、後ろ向きになって、すべりおろる。これを繰り返す。爺婆はそれに付き合うしかない。さすがに5つ目のベンチからは抱き上げた。

屋台の前を通るが、興味を示さない。そうか、一歳半はまだ、あれを買ってほしいとか、これが欲しいとか思わないんだ。しかし鯛焼きの店の前を通ると、無性に食べたくなった。一個250円。悦子の財布には一万円札一枚きり。2個でいいところだが4個買った。釣銭を使わせるのが申し訳なくて、お店に気がつかなかったっつうだ。

弁天橋を渡ってからは、しばらくそこで遊ばせたあと、抱きあげ、さっさと帰った。孫も歩き疲れたのか、抱かれるままいい子にして家に着いた。上野池周遊旅行を終えた。

考えてみれば、孫がいたから散歩に出かけたが、私たち二人なら、家から眺めるだけで、せっかくの桜並木を歩くことはなかったかもしれない。

上野池に住んで38年になる。こどもが小さかったころは、引き連れて桜を楽しんでいたが、もう何年も二人で、こんなにすてきな散歩道を歩くことがなくなったような気がする。

II 瓢山

日曜日からの冷たい雨に打たれて、さくら色もあせて葉桜に変わろうとしている今朝、瓢山に行ってみた。

瓢山への緩やかな坂道を上がったところにある古墳は、小学生のときの遠足コースだった。この古墳に上ると庄原の町が広がっていたような記憶があるのだが、今朝は木々が邪魔してかすかにしか見えなかった。私の記憶違いなのか。

この瓢山古墳には藤棚があり、箱型のブランコがあった。今は、藤棚はあったが、手入れされているようには見えず、ブランコはとっくの昔に取り払われていた。

ここには倉田百三の文学碑があるが、これも手入れされている様子が見えない。

『倉田百三 この町に生れ この地に遊ぶ 昭和三十二年四月建』という文字も判別しにくい。上野池の入り口にある百三の生家とともに、もっと活用すればいいのと思ってしまう。

それでも、つつじが美しい。ソメイヨシノのうすいピンクではなく、きりっとした濃いピンクのつつじが、それぞれに、その美しさを主張するようにここにある。やさしい色の桜とは対照的な強い色のつつじもまた、上野池の魅力にちがいない。しかし、つつじもまた、ここにあるからあるという感じでしかない。忘れられてしまっている。かわいそうだ。

III 令和の上野池

単身赴任で庄原に勤務しているという、山口県の出身の男性と話す機会があった。我が家で、目の前に広がる上野池を見ながら彼は「上野池ってすごいですね。こんなきれいな桜の名所はないんじゃないですか」と、ほめたたえていた。私もそう思う。

何年前か、シンセイアートの塩本会長が、「上野池をなんとかしたいんじゃ」と言ってきた。町づくりに意欲を見せる彼にとつて、上野池は庄原の宝物であり、これを活かさぬ手はないと考えていた。私も、それに異論はない、というか大賛成だ。

彼は、厳島神社の鳥居を再建したい、私たちが子供のころに催されていた十七夜の花火大会を復活させたいと抱負を述べ実行していった。コロナ禍で頓挫しているが、私は、もう一度、それに取り掛かれればいいと思いはじめた。

ただ、よく言われるような観光の拠点としてではなく、庄原に住む私たち市民が憩える公園としてあればいいのではないかと思う。今、日本中でオーバーツーリズムの問題がクローズアップされている。まあ、間違ってもそんなことになることはあるまいが、『観光』といったとたんに、地に足がつかなくなって絵空事のような言葉が飛び交う。それに観光というなら備北丘陵公園がある。上野池は市民が憩える公園にすればいい。

運動公園とのつながり、去年だったか発表された遊具施設を備えた公園の新設も踏まえたうえで、庄原のシンボルとして、もう一度、上野池を考えれば…。

思い出した。57年前の3月10日。中学校の卒業式を終えた私たちの何人かは上野池に集まった。晴れの日にぴったり天気の良い日だった。私は、当時好きだった女の子と二人でボートに乗った。運動会のフォークダンスでしか女の子の手をにぎったことのない15才。ドキドキしながらオールを漕いだ。

あれは昭和の上野池の思い出。令和の上野池は、もうちょっとばかり進化させたいものだ。

忘れてはいけないのは『観光』という言葉は脇においておくこと。どこまでも市民の憩いの場であればいい。

桜の季節でなくても、孫と一緒に散歩したくなるような、いや、孫がいなくても散歩したくなるようなそんな上野池にしたいものだ。



桜満開の上野池